
ラヴソング

秋空遙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラヴソング

【Nコード】

N0389F

【作者名】

秋空遙

【あらすじ】

記憶を失った少女、楓佳夜。僕は佳夜に記憶を思い出してもらうために、その日病院に訪れた。僕は、絶対に彼女に記憶を取り戻してもらおうと、心に誓った。

プロローグ

カッ カッ

靴の音が病院の廊下に不気味に響く。

昼間だというのに病室の中はどこか薄暗い。

廊下の先に見える非常口の緑色のランプが妙に不気味だ。

僕は突き当りにぶつかると手前で足を止めて、ゆっくりと右側の病室に体を向ける。

入院者の名前を確認。

「楓佳夜」（かえでかよ）

確かに、目的のその人だ。

僕はゆっくりと病室の取っ手に手をかけ、ノックもせずになんかスライドさせる。

途端、花のような香しくどこか甘い香りを感じた。

狭い病室の個室のベッドに、上半身だけを起こして窓から景色を見ている少女。髪は透きとおるような黒。黒なのに透きとおるという表現はおかしいかもしれないが、だがその黒は本当に透きとおるようなほど美しく、そして川のように真っ直ぐに流れ落ちている。

彼女は突然の来訪者にも気付かずに、窓の外を眺めている。

「こんにちは」

僕はなるべく彼女を驚かせないようにゆっくりとそう囁くように言った。彼女は少しも驚きもせず、ゆっくりとこちらを振り返る。その瞳は髪にも負けないほど透きとおるような黒、肌は透き通るような白に微かに桃色がかかる頬。嫉妬するほどに美しい、素直に思

ってしまった。

「久しぶりだね、佳夜」

僕は病室の入り口に突っ立って、そうほほ笑んだ。すると彼女は少しだけ申し訳なさそうな顔をして。

「すみません、どちらさまでしょうか？」

そうポツリと呟いた。

わかっていただけだから、特に驚くことはない。

僕は微笑みを崩さずに

「恋人の、蒼也あおやだよ」

そう続けた。

彼女の顔はより一層悲しみに染まった。深く、広い悲しみがその美しい顔を所狭しと埋め尽くす。俯いたまま、彼女は床に向かって話しかける。

「えっと………すみません、私記憶が」

「うん、知ってる。医者から聞いた」

僕は彼女の返事を予測していたから、半ば遮るように口を開いた。彼女は驚いて顔を上げる。大きく深く黒い瞳が、この時僕の目と初めて合う。

「だから僕は、君に記憶を取り戻してもらったためにここに来たんだ」

その深い瞳に言葉を投げ込むように、または突き刺すように僕は
言い放つ。

一切のためらいも不安も何も無い。

あるのは揺るぎない覚悟だけ。

それだけだ

第1章 思い出を失った少女

彼女は困惑していた。

それはごく自然のことだと思う。いきなり見ず知らずの人間が病室に入ってきて、「君の記憶を取り戻しにきたんだ」なんていい始めたら、それは困るにきまつてる。

「あの……恋人つておっしゃいましたよね？」

恐る恐るといった感じで、彼女は言葉を続ける。

「うん。そうだよ、佳夜」

「えっと……失礼ですけど、それは本当ですか？」

やっぱり疑わしいんだろう。

もちろん、証拠になりそうなものなら持ってきた。

僕は彼女のベッドの傍に置いてある丸イスに腰をおろして、服の内ポケットから白い封筒を3通ほど取り出す。封筒といってもラブレターなどに使うようなかわいい封筒だ。

その3通を先ほどから困惑した表情で黙っている佳夜に渡す。佳夜はゆっくと僕から封筒を受け取り、それをぼんやりと眺めながら「あけてもいいですか？」というアイコンタクトを送ってきた。僕は黙って頷く。

彼女は丁寧に封筒を開き、中から手紙を取り出し読み始める。彼女の表情は読んでいくうちにどんどんと真剣なものになっていき、3通目を読み終わる頃にはまた困惑が彼女の顔を覆っていた。

「これ……?」

「見ての通り、手紙だよ。全部君から僕に宛てられたものだ」

「やっぱり……そうなんですか」

その手紙には色々なことが書いてあった。今日あったこと、おもしろかったこと、将来の夢といった内容の文面が、可愛らしい文字や絵で飾られている。

「僕たちは付き合っていた時文通をしていたんだよ。佳夜が言い出したことなんだよ？ メールとは違う楽しみがあるって言って」

僕は笑いながらそう言った。

けれど彼女は力なく微笑むばかりで、その顔に喜びは一向に姿を現さない。

それは当然のこと、これだけで思い出せるわけがないのだ。これからゆっくり、ゆっくり思い出してもらえばいい。

彼女は全部の手紙を2回ほど読んだところで、力なく首を振った。

「ごめんなさい……思い出せないわ」

「そっか……うん、そうだよね。これでいきなり思い出せたらびっくりだよ」

そう言って笑うと、つられるように彼女も笑ってくれた。とても弱弱しかったけれど。

「今日はこれぐらいしておくよ、また明日もくるね。あ、手紙は佳夜が持っていていいからね。何か思い出したら教えてほしいんだ」

僕はそういつて丸イスから立ち上がり、振り返ろうとした。

「あ、あのー！」

引き留めるように彼女がそう叫んだので、僕は足を止めて彼女の方に顔を向ける。

「あなたは」

「蒼也」

「え？」

「蒼也って呼んでほしい。そう、呼んでくれてたから」

そう言つと、少し戸惑つてから彼女は微笑んだ。

「蒼也は、本当に私の恋人だったんですね？」

心なしか、どこか嬉しそうに見える。

きつと、彼女にとって僕は失った記憶の唯一の糸口となつたのだらう。

まだ不安の色が濃いその瞳の奥に微かに、けれど確かに姿を覗かせる希望の光。

僕はふつと微笑んだ。

「思い出せば、わかるさ」

微笑んだままそう言つたあと、病室を後にした。

第2章 思い出の丘で

ある日の夕方、医者の話によると楓佳夜はその日に車にひかれて頭を強く打つたらしい。救急車に運ばれた彼女は一命を取り留めたが、代償として記憶を失ってしまった。

その日は雨がすごく降っていた日だから、覚えている。

僕がそれを知ったのは5日後だった。彼女が事故にあった日、僕にはどうしても抜け出せない用事があったのだ。

数日して用事も終わり、大学へも行くようになったのだけれど彼女の姿が無い。

連絡も取れないので僕は不思議に思い先生に尋ねると、事故にあつて入院したということを教えてくれた。

病院に行き、楓佳夜に面会をしたいと受付の人に行つたところなれど彼女との関係を尋ねられた。知り合いだと思えると、しばらく待たされた後医者らしき人物が現れて事情を説明してくれた。彼女は記憶喪失になっていて、自分の名前以外は友人どこるか家族の名前すら思い出せないということらしくつた。

僕は迷つた。彼女に会うべきか、会わざるべきか。

それからしばらくして、僕は昨日彼女の元に訪れた。

彼女は案の定記憶を失っていた。

僕は、彼女の記憶を取り戻そうと誓つたんだ。

僕は学校を終えると、まっすぐに病院へと向かつた。

彼女の病室は最上階の隅に追いやられるような場所に位置していて、それがなんだかとても寂しく思えた。

彼女の病室の前に立ち、今度はノックを2回した。するとすぐ中から返事があり、病室へと入る。

僕の顔を見ると彼女は少しだけ微笑んでくれた。まだ僕に心を開いてはくれていないようだ。それも当然だろう、多分彼女は僕が本当に恋人なのかどうかまだ疑っているの段階なのだから。

ぼくは軽く挨拶をしてベッドの傍の丸イスに座った。

彼女の髪から漂う香りが部屋を満たしている。

「調子はどう?」

「体の方は特に何も無いから……大丈夫」

「そっか」

「それは?」

彼女は僕の膝の上に置いてあるビニール袋を指す。

僕は無言でビニール袋の中からリンゴを取り出し「お見舞い、リンゴ好きだよね?」と言いながらリンゴを渡した。

「後で看護婦さんに切ってもらって」

「あ、ありがとう」

ぎこちないお礼。

他人行儀、とてもじゃないが恋人同士の会話には見えない。

「あれからどうやって佳夜の記憶を取り戻そうか考えたんだけど……とりあえず、思いで話でもしない? と言っても、僕が一方的に君との思い出を話すだけだけど」

苦笑しながらそう言うと、彼女はまたつられるように笑った。その微笑みはどう考えても彼女の本心じゃない。僕が笑ったから、機嫌をそこねないように合わせて笑った、ただそれだけだろう。感情のない微笑み、まるで人形のように不気味だと思った。

「そうだなあ……じゃあとりあえず、僕たちが出会った日のことでも」

そう切り出して、思い出を一人で喋った。

とりあえず、なるべく古いものから思い出せるだけ思い出した。彼女は僕の言葉に時折微笑み、驚きながら耳を傾けてくれた。その動作ひとつひとつが本当に他人行儀で、僕にただ合わせているだけという感じだ。その動作一つ一つに彼女との悲しい距離を感じた。僕は特に気にしないでふりをして、話を続けた。

そうして小一時間ほどたって、話をとりあえずひと段落つけた。

「どう？　何か思い出せそう？」

そう僕が訊ねると、彼女は目を伏せてゆっくりと首を振った。

「そっか……まあ、ゆっくりがんばろう？」

「ありがとう……蒼也」

彼女はゆっくりと名前を呼んだ。

それは今彼女にとってただの無意味な名詞でしかない。記憶を失うとともに、蒼也という恋人の名前はただの名詞としてなくなってしまった。

その名詞がまた大切な言葉に息を吹き返せるように、がんばろう

と思う。

その日、僕は初デートの時の話をして思い出話を終了し病室を出た。

外はもう夕暮れで、7月といえども肌寒かった。

アパートに帰ると、まずコンタクトをはずし身につけていたものを全部脱いでシャワーを浴びる。このシャワーを浴びる瞬間が最高だ。

シャワーを浴びてから身軽な服に着替えなおし、眼鏡をかける。家では眼鏡だ。

それから机の引き出しの中に入っている大量の封筒から一通抜き取り、中の手紙を読み始める。その封筒には楓佳代が霧乃蒼也に宛てた手紙が入っている。

その手紙からは、少女の少年に対する切実で微笑ましい思いがひしひしと伝わってきた。

僕はそれを穴があくほど読んでから、ゆつくりと晩御飯を作る。

大学生の僕は勿論一人暮らしである。最初はめんどくさかった洗濯や料理も、慣れてしまえば楽しいものだった。

いつもどおり一通り家事全般をこなし、テレビを見ているともう時計は寝る時間をさす。僕はゆつくりとベッドに潜り込み、明日はどうして彼女に記憶を取り戻してもらおうか、目を瞑りながら考えていた。そうしていつの間にか、深い眠りへと落ちて行った。

翌日は休日。チュンチュンという鳥の鳴き声で穏やかに目覚めた。

早速朝のシャワーを浴びる。風呂場から出ると、それが朝のシャワーではなく既に昼のシャワーになっていることに気付いた。

朝ごはんとも昼ごはんとも言えないご飯を食べながら色々と考えてみたが、結局何も思いつけずに、また思い出話でもしようと考えてながら食器を片づけて玄関の扉を開き病院へと向かった。

彼女の病室には先客がいた。おそらく彼女担当の医者だろう。そういえば、最初に僕に彼女が記憶喪失だと教えてくれたのもこの人だ。

僕が病室に入ると二人の顔と目がこちらを向いた。医者はどうやら僕に気付いたようで、柔らかな表情をして会釈をしてきた。僕も小さく会釈を返す。

どうやら医者の話はもう終わったようで、「それじゃあまたあとで」と佳夜に言つとゆっくりと立ち上がってこっちに歩いてきた。

「やあ

「こんにちは

「本当に彼女の記憶を取り戻そうとしてくれてるんだってね。ありがとう、医者がこんなことを言っただめかもしれないけど……
……正直、期待しているよ」

医者は照れ臭そうに、後頭部を掻きながら笑った。

「全力を尽くします」

その言葉を聞くと、医者は安心したように頷いた。

「そういえば、妹さんは元気かい？」

「はい、元気ですよ」

「そうか、それはなにより」

そんな日常会話をしたあと、軽く挨拶をして医者は病室を後にした。その間佳夜は黙ってこちらを見ていた。僕と目が合つと、少し気まずそうに視線をベッドへと落とす。僕も何も言わずにベッドの傍の丸イスへと移動した。

「妹さん、いるんだ」

どうやらさっきの会話が聞こえていたらしい。

「うん、あかね紅音っていうんだ。今度紹介するよ」

その後は昨日と同じで、ひたすらに思い出を彼女に喋った。彼女は始終ぎこちなく微笑んだり、わざとらしく驚いたりしていた。

やっぱり、恋人同士が会話をしているようには見えない確かな気まずさがそこにはあった。

数日間、そんな日々が続いた。彼女のぎこちない態度も少しずつだけどほぐれていった。それはいいことだと思ふ、それはいいことなのだけれど、記憶の方では一向に進展がなかった。

これではだめだと感じた僕は、ある提案を彼女にすることにした。

いつもの通り、僕はベッドの傍の丸イスに腰掛けた。
当然、彼女も僕が思い出話をしてくれるのだからとベッドに座り
身構えている。

「ねえ………体の方は特に何も異常はないんだよね？」

「先生にはそう言われてるけど………？」

いつもとは違う話の始め方に困惑したのが、彼女が不思議そうに
僕の目を見つめる。

「じゃあね」

「いいのかなあ………？」

「大丈夫大丈夫」

僕は今、病院の前のバス停でバスを待っていた。

「思い出話」から「思いでの場所」へとベクトルを変えることに
したのだ。

つまり、デートで行った場所や思い出となった場所に実際いつて
みよう、ということだ。

もちろん医者には許可をとった。彼女の担当と思われる医者に事情を話したところ、二つ返事で許可をもらえた。

最初はどうしようかと迷っていた彼女も、記憶を取り戻すためだと説得したら怖々ついてきてくれた。

そうして今に至る。

目的地はバスで15分ほど行ったところだ。

さっきまでパジャマだった彼女も今は私服を着ていて、より一層彼女の美しさは際立っていた。

ちなみに私服は僕が持ってきたものを彼女に渡した。

なぜ僕が女物の私服を持っているかは秘密だ。

バス停のイスでバスを待っている間も、彼女はどこか居心地が悪そうにしている。

目をキョロキョロと泳がせたり、手をこすったり、髪をいじったりと落ち着かない。

僕はそんな彼女を隣に座って横目で流すように見ていた。

今日はだいぶ暖かい、夏がもうすぐそこまで来ているのだろう。

それから数分してバスが来た。結局バスがくるまで二人の間に会話が交わされることがなかった。相変わらず、二人の間に流れる空気が堅苦しい。

バスには乗客が僕ら以外に数人しかおらず、空席が寂しそうにひしめいていた。

僕らはバスの一番後ろの席に並んで座る。プシューという音ともに扉がしまり、ガタコトと揺れながらバスが進む。

「あっ！」

彼女が何か突然思い出したように叫ぶ。

「どっしたの?」

「あ、あの！ 私お金もってない！」

「僕が持つてるから大丈夫」

「え!?!? で、でも」

「いいからいいから。彼女のバス代ぐらい彼氏に払わせてよ」

「は、はい……………」

彼女は風船に空気が抜けるようにしょんぼりとして、聞こえるか聞こえないぐらいの声で「ありがとう」と小さくつぶやいた。僕は気付いたけれど、何も返事をせずに窓の向こうで流れる景色を眺めていた。

彼女はうつむいたまま、くっついた自分の両膝とにらめっこしている。

「僕らね」

「えっ!?!?」

余程会話がないのが気まずかったのか、僕が言葉をはっすると彼女はものすごい勢いで僕の方に振り向いた。

その動作がなんだかわいくて、少し笑ってしまった。

すると彼女はみるみる顔を赤らめて、また膝とにらめっこを開始する。

「僕ら、よくこのバスに乗ったんだよ」

「あつ、そう……なんだ」

「うん。君はよく、このガタコトと揺れるレトロな感じのバスが好きだって言ってた」

このバスは一世代古いのか、外観内装ともにどこか古めかしくガタコトと道走る時の振動も大きい。スピードもゆっくりだ。彼女はそんなレトロなところが気に入ったらしい。

彼女はやっぱり思い出せないのか、気まずそうに目を伏せて申し訳なさそうに首を横に振った。

「今はどう?」

「えっ?」

「今の佳夜は、このバスはどう思う?」

よく意味がわからないといった感じで、僕の目を見ながら首を傾げる。

「んー、なんていうか。昔の佳夜、つまり事故にあう前の君はこのバスが好きだと僕は知ってる。けど、記憶を失った今の君がこのバスが好きかどうか僕は知らない。昔の君ばかり望んで、今の君を見ようとしなのは間違いだと思うから。記憶があるうとなかると、佳夜は佳夜なんだから」

なんどかつまづきそうになりながら、自分が感じたことを言葉にしてみる。抽象的な話だからなんとも言葉としては伝えにくかった。彼女にしっかりと伝わったかどうか不安だ。

彼女は少しの間ポカーンとしていたけれど、やがてゆっくりと微笑んでくれた。

それは、今までのように他人行儀なものではなく、彼女の本心からの微笑みのように思えた。それほどに、美しく思えた。

僕はコホンとひとつ、わざとせきをする。

「もう一度聞くな。佳夜はこのバスが好き？」

改めてそう訪ねると、彼女はゆっくりと目を瞑った。

ガタコトと揺れ、ブレーキをするたびに大きな音を立てるバス。

ゆっくりと流れる景色の中を走る。

古めかしい内装からは、どこからか懐かしいにおいが漂っている。

彼女はこのバスを堪能するかのように目を閉じている。

やがてゆっくりと目を開くと

「好き」

と、小さくつぶやいた。

それから数分すると、バスは街並みを抜ける。さっきまで家々が見えていた景色にもいつの間にかその家は消えて、草原や田んぼがその姿を見せ始める。

ガタコトバスの中には、いつの間にか僕ら二人しかいなかった。その中でポツポツと会話を交わした。それは恋人同士がするようなものではなかったけれど、彼女が少しずつ僕に心を開こうとしてくれているのが見てとれて、ほんの数回の会話でも結構前進したように思えた。

しばらくして、バスは「月が丘公園前」というバス停に止まる。目的のバス亭だ。

月が丘公園と言っても、本当に丘があるだけだ。結構長い階段が丘のてっぺんまで続いている。彼女は黙って丘の方を見上げていたけれど、僕が手を引くとゆっくりとした足取りで僕に続いて階段のぼりはじめた。何も言わずに手を握ってしまったけれど、彼女は何も抵抗せずに受け入れてくれた。

しばらくそうして平坦な階段を上ると、丘の頂上に着く。頂上には一本の大きな桜が咲いている。といっても今は7月だから、いずれピンクの花が咲き乱れる枝では、今は緑色の葉が風に舞っていた。

「わぁ・・・・・・・・・・」

彼女は頂上につくと感嘆の声を漏らした。丘の頂上からは街が一望できるのだ。

「すごい・・・・・・・・・・」

放心したように彼女はその景色に魅入られていた。時折風がなびき、彼女の髪やスカートをなびかせる。

「ここからこうして景色を眺めるのを、佳夜はとても好きだったんだ」

僕は彼女の隣に並んで、同じように街を眺める。

僕らの街は田舎だ。高いビルなどなく、同じような高さの家々でひしめいている。街の向こう側には山々が見える。残念ながら海は見えないけれど、代わりに大きな川が少し顔をのぞかせている。彼女はずっとそこから町を眺めていた。

「私……この景色、知ってる」

「えっ？」

「うん……知ってる。この景色、すごく好きな……
大好きな景色」

自分に言い聞かせるようにそんなにも呟きながら、彼女は街を眺めている。

色々と聞きたかったけれど、僕も習うように黙って街を眺めた。

「そっか……そうだったんだ……」

そして彼女はいつの間にか、涙を流していた。

声も出さずに、静かに涙を流し続けていた。

その涙に彼女はいつたいどんな思いを込めているのか

失ったしまった過去への贖罪か、それとも喜びか……

いずれにしろ、僕には気づかない振りをすることぐらいしかできなかった。

それから彼女は、空が朱にそまるまでそこに立っていた。

僕は彼女が満足いくまでそこにいようと決めていたので、何も言わずに彼女に寄り添っていた。

帰りもあのレトロバスにのりながら病院へと向かう。
帰りのバスに乗っていたのは僕たちだけだった。

ガタゴトと揺れるバスのなか、二人きりの僕らは会話一つ交わす
こともせず世界を共有していた。静かだったけれど、彼女の横顔
はどこか幸せそうだった。

病院前のバス停につき、僕らは別れる。

彼女は病室へ、僕はアパートへ

「あ、あの」

別れ際、彼女がどこか顔を赤らめながら恐る恐る口を開いた。

「何？」

「あ、明日も……その、どこか連れて行ってほしい……
……な」

「えっ」

顔を赤らめながら後ろに手を回し、どこかそわそわしながら上目
づかに口を開いた佳夜。

驚いた。彼女が自分からそんなことを言うなんて。

多分、記憶が一部垣間見えたことで希望が見え始めたのだろう。

それは僕にとって喜ばしいことだ。目的を達成するためには、彼
女自身がやる気になってもらわなくては話にならない。

だから僕は一瞬戸惑ったあと、

「もちろん」

そう言って笑った。彼女も笑ってくれた。それは、とても恋人同士のように見えた。

僕は帰ってから、いつも通りシャワーを浴びていつもどおり眼鏡をかけて、いつも通り彼女の手紙を読んだ。引出しの中に入っている数十通の手紙は内容をすべて覚えるほどに読んだ。

今日一歩進んだことが、嬉しかった。

それと同時に、少しだけ苦しくもあった。

「明日もがんばろう」

明日どこに彼女を連れていくかを考えながら、僕は晩御飯も食べずにベッドに身を沈めた。

第3章 思い出の海で

血、血、血

どこまでも広がる血

腹部に刺さる煌めき

穏やかな顔

安心しきった顔

なぜ？ なぜ君はそんな顔をしているの？

教えてよ、ねえ……………

「……………」

目が覚めた。大量の汗でシャツがベトベトしていて気持ちが悪い。

「夢か……………」

なんとも目覚めが悪い。最悪の夢を見てしまった。

僕は立ち上がり、いつもより念入りにシャワーを浴びた。夢の光景はまだ僕の頭の中にしっかりと焼き付いている。忘れたくても忘れられるわけがない。

ザーザーと雨のように、ノイズのように僕の頭を打ち付ける水滴。その水滴がこの夢を流しきってしまえばいいと願うのと同時に、絶対に忘れないという決意を抱く。

キュツとシャワーを止めて、タオルに身を包みながら僕はお風呂場を出た。

顔を拭いて鏡を見てから、僕の目が異様に赤いのに気づく。寝不足だろうか

それからいつもどおり着替えて、朝食を食べる。面会に行くにはまだ少し早い時間帯だ。時間つぶしのためにも、また胸に再び刻み込むためにも、佳夜の手紙を再び読み直す。何度も何度も読んだ。もう完璧に覚えてしまった手紙を。

彼女の病室には大体昼過ぎぐらいについた。僕がノックをしてから病室に入ると、彼女は笑って迎え入れてくれた。

軽く挨拶をかわして、僕は何時もどおり丸イスに座る。すると彼女は僕に「今日も思い出話をしてくれるの？」と楽しそうに訊ねてきた。

最初のころとは全然違うその表情。

「それもいいんだけど、昨日も言ったとおりどこかに連れて行ってあげようと思って」

「ほんと！？ 嬉しい！」

彼女は身を乗り出して僕に顔を近づける。彼女の淡い香りが僕の体いっぱい広がる。

どうやら昨日の一件は彼女にとってかなり大きな出来事となったらしい。

「それより、何か思い出した？」

それを聞くと、乗り出していた身をひっこめて悲しそうにつつむく。

「あの景色以外は………何も」

「そっか………」

予想はしていたことなので悲しくはないが、やっぱり少しだけ残念。

一転して彼女は明るい表情を取り戻し「それで、どこに行くの？」とらんらんと瞳を輝かせて僕に訊ねた。どうやら、よっぽど思い出の場所に早く行きたいらしい。

「うん、今日はちょっと遠くまでいってみようと思うんだ」

「そこは私たちにとって、一体どんな思い出の場所なの？」

彼女はまるでプレゼントの箱を開くように、僕の答えをわくわくしながら待っている。

「それは………」

もったいぶらすようにためらってから、

「行くまで秘密」

と応えた。

一瞬キョトンとしたあと、彼女は「あはは」と声に出して笑った。

昨日と同じ通り病院の前でバスを待つ。と言っても、昨日とは反対方向なのでバスもあのレトロバスではなく普通のバスだ。

最初は少なかった乗客も、町中に行くにつれで徐々に増えていき座席はすべて埋まるほどになった。

彼女は流れる街並みを興味深そうに見ていた。

どうやら彼女は記憶を失ってから一度も街に出ることがなかったらしい。

記憶を失って全く見知らぬものとなったこの街を一人で歩くのが怖かったそうだ。

だから彼女は何か珍しい建物を見るたびに「あれはなに？」と僕に訊ねた。僕はその一つ一つにゆっくりと応えようと、彼女は「そうなんだあ」と感嘆の声を漏らしてまた食い入るように窓の向こう側を見つめる。僕はそんな彼女を見つめていた。

そんな時間が数十分流れて、僕らは駅に着いた。

駅前は結構人通りが多い。彼女は目が回りそうにしていたので、僕はその手を引いて駅の中へと入る。今度も彼女は僕の手を素直に受け入れてくれた。

僕は二人分のキップを買って（彼女はかなり申し訳なさそうな顔をしていた）、ちょうど来た電車に乗り込む。

電車で揺られる間、彼女はバスの中と同じように電車から見える風景に食い入っていた。バスの中のように「あれはなに？」とは訪ねてはこなかったけれど、興味津津といった感じだ。

数分後、僕らはかなり田舎の駅に降りる。この駅に降りたのは僕らだけだった。

駅員さんにキップを渡して、街に出る。駅前にも人はいない。

僕は無言で困惑する彼女の手を引きゆっくりと歩き出す。

バスはないから、数分歩かなければいけない。

最初はどこに向かっているのかわからず不安そうにしていた彼女であったが、しばらくしてある独特の臭いが鼻をつき始めると、彼女ははっとした。どうやら目的の場所がわかったようだ。ほほ笑みながら僕の手を握り返す。

しばらくすると、ザザーンという音が聞こえ始め、それと同時に石の壁のようなものが見え始める。

石の壁にぶつかると、今度はそれを伝うように歩く。しばらくすると階段を発見したので、それを使って石の壁の上に登る。

「わあっ……………」

上り切ると、彼女は昨日と同じように感嘆の声をあげた。

「海……………」

「うん」

僕は防波堤の上になつて海を眺めていた。まだ少し肌寒いこの季節、浜辺に人はいなかった。海の上には粒のように小さくなった漁船が点々としていて、その先には霞がかつたように薄い島が見える。独特の潮の香りが満ちていた。

「佳夜は海が好きだった。眺めるのも、泳ぐのも。今はちよつと泳げる季節じゃないから、波打ち際をあるところか？」

「うん」

彼女は笑顔で僕の言葉にうなずいた。

僕らは手を握り合っただまま、防波堤を下りて波打ち際までいく。

彼女は靴を脱ぎ、素足になって砂の上を歩く。

時折足首まで届く海水が冷たく、気持よさそうだ。

僕は靴を履いたまま彼女の足を踏まないように気をつける。

お互い何もしゃべらずに無言で歩いていたが、突然彼女が靴を持っただま走り出した。

そして数メートル僕と距離をとると、振り返って「蒼也ー！」と言って手を振ると、また走り出した。

どうやら追いかけてほしいらしい。

マンガとかではよくある恥ずかしいシーン、それを実際やってほしいのだろう。

僕は一回苦笑いして、少し恥ずかしかっただけど望み通り彼女を追いかけた。

そうしてしばらく時間をすごしたあと、僕らは防波堤に並んで座った。

彼女は始終本当に楽しそうだった。今もにこにここと幸せそうに微笑んでいる。

「ここが一体僕らにとってどんな思い出の場所か、思いだした？」

もしかしたら今の彼女の気分を害してしまうかもしれないけれど、訊かずにはいらなかった。そもそもそれが目的だったのだから。

予想通り、彼女は悲しそうに首を振る。

「ごめんなさい……………」

「そっか、ううん。ゆっくり思い出していいよ」

彼女は力なく微笑む。

僕らはそれ以降会話をすることなく、けれど帰るのも心残りがあったのでお互い立ち上がるうとはしない。

彼女はうつむいたまま、ぷらぷらと素足を空中散歩させながらつま先を見つめている。

僕はまっすぐ海を見据えていた。

時が来るのを待っていた。時間的にも、もうそろそろだと思っ

彼女は相変わらず寂しそうにしながら、円を描くように足をぷらぷらさせている。

波の音と独特の匂いが満ち満ちている。

後ろの街からもまったく人の気配はしなかったから、まるで世界中に僕ら2人だけしかないような錯覚を覚えた。

風が僕らの間を通り抜ける。彼女の髪が風に身を任せて空を舞う。

時間だ。

「ほら、見て」

僕は海の方を指さして彼女に言う。

彼女は一度僕の顔を見てから、僕の指さす方向に顔を向ける。

「わあ……………」

途端、彼女の瞳が潤う。

真紅の夕日が半分ほど、海に顔を沈ませている。
揺れる波も赤色に染まり、紅色の空には少し赤みがあった真白の雲が浮かんでいる。

夕焼け、まさに文字通り燃えるような夕焼けだ。

彼女はいつしか口元に手をあて、涙をこらえるようにしていた。

「綺麗……………」

「うん」

「そう、この夕日、そう、そうよ！」

彼女は突然僕の方に振り向き力強くそう叫んだ。僕は驚き、少したじろいってしまった。

「この夕日、確かに私見たことがある！ でも、それだけじゃない……………なにか、大切なことが抜けている気がするの……………ねえ、蒼也。私たちはこの夕日を見ながら」

そこで彼女ははっとして、言葉を止める。

僕はその彼女の顔を、その瞳を一心に受け止める。

夕日に染まる僕らの横顔。

彼女は僕の顔を見つめながら停止している。

僕も同じように、彼女の次の言葉を待つ。

「この、夕陽を、みながら……………」

言葉を一つ一つ紡ぎながら、彼女は目を閉じる。

そして少しずつ、彼女は僕に顔を近づける。

僕は何の抵抗もせず、彼女と同じように目を閉じた。そして、唇が交わう。

彼女の体温が、呼吸が、香りが僕の体を駆け巡る。

僕と彼女がキスをしている。

そのことを考えるだけで、鳥肌が立った。

しばらく僕らは、時間が止まったかのように唇を交えていた。

1、2分たっただろうか、どちらからとも言えずに僕は離れた。彼女の顔が赤くほてっている、多分夕陽のせいだけではないだろう。

「不思議な味……男の子とのキスって、こんな味なのね」

放心したように、彼女はそうつぶやいた。

「僕は男の子とキスをしたことがないから、わからないよ」

冗談交じりにそう応えると、彼女は幸せそうに笑った。

また一つ、思い出が息を吹き返した。

「ねえ、蒼也」

病院の前に着くころには、すっかり日も暮れて夜になっていた。許可を取っているとはいえ、さすがにこれは怒られるかもしれない。

けれど彼女は全然気にしていない様子だ。

さよならの挨拶を交わし、僕が振り返りアパートの方へ向かおうとすると、彼女が呼び止めるように僕の背中に声をかけた。

僕はゆっくりと振り返る。

「何？」

「あ、あのね………」

顔を赤らめながら、もじもじとしている。もう夕日はとくに沈んだから、彼女の顔の赤らみは恥ずかしさからであるものだろう。

「今から、蒼也の部屋に行っても、いいかな？」

彼女は真赤になりながら、その言葉を口にした。

虚を突かれて、一瞬呆けてしまった。

つい先日まであんなに不安そうにしていた彼女の言葉とは思えなかった。

きつと、その言葉を帰りの間ずっと考えていたんだろう。

その提案をするのに、その言葉を言うのにどれだけ勇気を振り絞ったのだろう。

僕は真赤な顔で不安そうに返事を待つ彼女の顔を見つめながら、ゆっくりと返事をした。

「それは無理だよ」

「えっ……」

明らかな落胆。

赤らんでいた顔がみるみると後悔の念に染まる。

「だって佳夜はまだ一応この病院に入院しているんだから、それはさすがに許されないよ」

「そっか、そっだよな」

ぎこちなさそうに笑う。その瞳は蝋燭のように揺らめいている。

「そのうち」

「えっ？」

「そのうち絶対、招待するから」

「……うん。楽しみにしてる」

そう言って笑うと、彼女は身を翻して走りながら病院へと戻って行った。

そう、いつか必ず彼女にはあの部屋に来てもらわなければいけない。

きっとそれが、彼女の記憶という閉じられた箱を開ける唯一の力ギとなるのだから。

見えなくなるまでその背中を見つめてから、僕はアパートへと足を踏み出した。

第4章 思い出の歌声で

不幸にも、“彼”の第一発見者は僕だった。

僕は何時もあり大学が終わり次第、部屋へと向かった。

その曜日は毎週その部屋に行くことになっていた。

だから、僕はいつも通りその部屋へと向かった。

そして戸を開けると、そこに“彼”がいた。

どうすればいいのかわからなかった。何が起こったのかわからなかった。

ただそこには、床を蝕むように広がった赤い血と、安心しきった“彼”の顔。

一体なぜそんな安心したような顔をしているのだろう。

“彼”は腹部の包丁を両手で握りしめている。

そして“彼”の頭付近の床にはある文字が書かれていた。

それは紛れもなく、彼の血で書かれている。

訳がわからなかった。僕はどうすることもできずに、ただ黙って

“彼”を見つめていた。

自分がいつの間にか涙を流していることにも気付かずに、ただじつと“彼”の穏やかな顔を見つめていたんだ。

ジュジュ

うるさい電子音。

目覚まし時計だ。

僕はそれを3回ほど叩き、音を止める。

今日は学校がある日だから、寝坊するわけにはいかない。彼女の病室に行くのは学校が終わってからになるだろう。

僕の大学はバスで数十分するところに位置している。僕は私服に身を包み、大学へと向かう。月曜日は毎週講義が多い曜日だから、正直だるかった。

僕はバスをゆりかご代りに、大学までの数分の道のりを睡眠で過ごした。大学の講義もおそらく、睡眠で過ごすことになるのだろうけれど。

そしてそれは、やっぱりその通りになった。

(睡眠) 講義が全て終了する頃にはもう夕方の時間だった。

病院に行く前に、僕はある教授の部屋へと向かう。

エレベーターで講義棟の6階へ上がる。最上階だ。ここからだと言女の病院も見えるかもしれない。

目的の部屋にたどり着くと、僕は一つ深呼吸してから部屋をノックし、失礼しますと一声かけてから部屋へと入る。

部屋の中は見渡す限りの本の海である。奥行きがある部屋の壁にはとにかく本がぎっしりと詰まった本棚が並んでいる。床にも数冊バラけて落ちている。

種類も多種多様で、化学雑誌やら小説やら考古学の本やら、とにかく山ほどの本がひしめいている。

僕はそんな本を踏まないように気をつけて、申し訳なさそうに置いてある机の前のイスに座る。すると奥の方から「は〜い」という声とともに、比較的若い男性が姿を現す。

「ああ、君か」

僕の姿を見ると彼は微笑んでから向き合うように座った。

「こんにちは、先生」

僕も笑顔であいさつをする。

「先生、髭剃った方がいいですよ？」

「ん？ そうか？」

そう言いながら先生は顎あたりに茂みを作りつつある髭をじよりじよりといじりだした。その様子がなんだか面白くて、僕はクスクスと笑ってしまった。

「それで、今日は一体なんの話をしに？」

「現状報告みたいなものです。彼女について」

「ああ、佳夜くんのことか」

僕は以前先生に彼女の記憶を取り戻すにはどうすればいいのか、相談したのだ。

彼女が交通事故にあつたと教えてくれたのも先生だ。

佳夜が記憶を失ったと医者に教えてもらった日に、僕はまず先生のもとへと向かった。

彼女と会うか会わないか迷っていた時に、相談にのってくれたのもこの人だ。

そして、記憶を取り戻すにはどうすればいいのかという相談にものってくれた。僕はこの人にはいくら感謝してもしつくせない。

「それで、どうだい？」

「はい」

僕は彼女に思い出話をしたこと、それで実際に思い出の場所についていったらそこでその思い出については記憶が戻ったことを伝えた。

まだまだ道のりは長そうだけれど、だが確実に記憶は戻りつつあると思う。

先生は始終少し微笑みながら僕の話聞いていた。

「そうか、とにかくそれはいい傾向だよ。どうやら重度の記憶障害というわけではないようだね。これからもそれを繰り返していけば、きっと回復するよ」

「ありがとうございます」

先生は満足にうんうんと腕を組みながら頷く。あいかわらず面白い人だ。

「ところで……」

ずっと微笑んでいた先生だが、そこで神妙な顔つきになる。

「君はいつ、あの部屋に彼女を連れていくつもりなんだい？」

ドクンと、心臓が鳴った。

彼女を思い出の場所につれていけば、断片的ではあるがその場所についての記憶を彼女は取り戻した。

だとすると、あの場所につれていけばそこで起こった思い出を彼女が思い出す可能性は高い。

「そうですね……」

僕は一度大きく呼吸をして、心臓を落ち着ける。

「早ければ、明日にでも」

先生が少し驚き、イスに深く座りなおした。

「それが僕の目的ですから。彼女が思い出すのだとすれば、すぐにも連れて行くつもりです」

「そうか……」

先生は考え事をするように、顎を手で覆った。

そう、それが僕の目的なんだ。

全ての思い出よりも、あの部屋で起こった思い出だけを取り戻してくれれば満足なんだ。

先生もそのことはよくわかってきている。だからこそ、こうして一緒に考えてくれているのだろう。

本当に、感謝してもしつくせない。

時計を確認すると、もうそろそろ大学を出ないと病院の面会時間に間に合わなくなってしまうそうだった。

「それじゃ先生、僕はもう行きますね」

「あ、ああ」

僕は鞆をひつつかみ、一度頭を下げてから立ち上がり、部屋を出ようとした。

「ところで」

先生の声。

僕は部屋の取っ手を握ったまま振り返る。

「なんですか？」

先生はさつきまでの神妙な表情ではなく、いつもの優しそうな顔に戻っていた。

「君の一人称はいつから“僕”になったんだい？」

その質問に、僕は笑ってしまった。

「癖ですよ」

その答えに先生は一瞬キョトンとしたあと、はははと大きな声で笑った。

「蒼也！」

僕が病室に入ると、彼女が嬉しそうにそう叫んだ。
時間はもう十分に夕方、部屋の中も若干赤く染まっている。面
会時間ももうあと30分ほどしか残っていない。
走ってきたから体が熱かった。

「ごめん、遅れた」

一言謝ると、彼女はぶんぶん顔を振った。

「ううん！ 来てくれただけでもうれしいよ！ もう今日は来てく
れないのかと思ったから」

彼女の言葉を聞きながら、僕はベッドの傍の丸イスへと移動する。

「あのね！ 今日、どうしても蒼也に言いたいことがあったの」
僕が座るや否や、彼女は何やら必至な表情でそういった。

「何？」

「あのね！」

ベッドから身を乗り出して、顔がくつつきそうなほどの距離まで
近づくと、
けれど彼女は恥じらいを見せずに、その距離のまま言葉をつづけ
た。

「思い出したの！ 蒼也の歌」

「歌？」

歌………歌………ああ、あの歌のことか

「うん。蒼也、よく歌ってくれたよね？ おぼろげだけど、でも確かに蒼也がよく歌ってくれたっていう確信はあるの。歌詞は思い出せないけど、メロディーはしっかりと思い出したの。だから、その」

彼女の言葉が終わる前に、僕は唇を広げる。

言葉に音を添えて、歌声を病室に響かせる。

彼女は驚き、そしてベッドにふかく座りなおして目を閉じた。

確か、どこかのインディーズバンドのラブソングだ。

歌詞はよくあるベタものだけど、彼女はこの歌をひどく気に入っていた。

3分ほどの短い歌。

切ないメロディー。

僕もこの歌は好きだった。よく歌っていたから、歌詞は体が覚えているかのように自然と口から出ては空気に溶けていく。

彼女は目を閉じて僕の歌声を静かに聞いていた。

何か、これでまた思い出してくれるだろうか？

3分経ち、歌が終わりを告げる。

この歌は、愛する人の死を歌うものだ。

愛する人との幸せな日々を思い出し、嘆き悲しみながらも、最後には愛する人の死を受け入れて前向きに進んでいくと決意する。

そんな歌詞でこの歌は締めくくられる。

歌い終わり、彼女の顔を窺う。

彼女は泣いていた。

目を閉じて涙を流していた。
すると涙がこらえきれなくなったのか、両手で顔を覆い嗚咽を漏らしながら泣き始めてしまった。
僕はそんな彼女を見つめながら、泣きやむのをただ待ち続けた。
夕暮れはほとんど沈み、部屋は暗闇にそまろうとしている時間帯だった。

「ごめんね、突然泣き出しちゃって」

「ううん、気にしないで」

彼女は目を赤く腫らしながら笑った。よほどの歌は彼女にとって大切なものだったのだろう。彼女は涙を流していたけれど、今まで一番幸せそうに、そして悲しそうに微笑んだ。

胸が突然苦しくなるのを感じた。
苦痛。

「どうしたの？」

彼女が心配そうに僕の顔を見つめている。どうやら表情に出てしまっていたようだ。

「ううん、なんでもない」

心配そうにこちらを見つめる彼女に優しく微笑む。ほほ笑んだと思う。

彼女は相変わらず心配そうにしていたが、僕はそれを無視して口

を開いた。

「あのね、大切な話があるんだ」

「何？」

また胸が、苦しくなるのを感じた。

意味があるのかな？

僕のこの行動に、意味はあるのかな？

一瞬、そんな言葉が頭を駆け巡る。

それも一瞬のこと。僕は迷わないと決めたんだから。

「明日、僕の部屋にこないかい？」

第5章 思い出の部屋で

僕は“彼”の穏やかにそして美しい顔を眺めた

この顔が好きだった

声が好きだった

香りが好きだった

僕は“彼”の永久に眠る横顔にそっと触れた

服が“彼”の血で汚れたけれど、気にもならなかった

酷く満足そうな顔

美しいと、思った

“彼”の死を美しいと思った

けれど、それもいずれ深く暗い悲しみに打ちひしがれた

僕は泣いた

“彼”の顔を僕の胸にうずめて、泣き叫んだ

泣いて、泣いて、泣いて

声が出なくなるまで泣いて

声が出なくなっても泣いて

なぜ、君はそんな幸せそうな顔をしているの？

なぜ、そんな穏やかな顔をしているの？

ねえ、教えてよ

「お兄ちゃん……………」

ピピピピピ！

目覚まし時計が僕を奈落から引き揚げる。

びっしょりの汗に身を包まれて僕は目覚める。
上半身だけを起こして、汗で垂れ落ちた前髪を掻きあげる。
そしてそのまま服を脱いで風呂場へと向かった。
夢は相変わらず、僕の頭にこびりついていた。
シャワーがそれを洗い流してくれるわけもないけれど、僕は必要
以上に頭を洗ってから風呂場を出て、服に身を包んだ。

今日は学校を休んで彼女の病院へと向かうことにした。
部屋に連れていくためだ。
彼女は思い出すだろうか？ 過去を思い出してくれるだろうか？
それだけを強く願いながら、玄関のドアを捻った。

病室へ入ると、彼女はどこか緊張した面持ちだった。
昨日のように笑顔で蒼也と叫んだりはずせずに、「おはよ」とぎこ
ちなく微笑んだ。

僕はいつもどおりの表情で「おはよう」と返した。
僕は無言のまま彼女のベッドの傍の丸イスに、いつもどおり腰掛
ける。

しばらくの間、静寂が僕らの間を漂っていた。

「ねえ、本当に部屋に連れて行ってくれるの？」

先に静寂を打ち破ったのは彼女の声。
おそろおそろと言った感じだけれど、彼女は口を開いた。

「もちろんだよ」

僕は平然とそう返す。多分、彼女にとってはかなり意外だったの
だろう。

つい先日「それは無理だよ」と言ったばかりなのに、突然てのひ
らを返したように「部屋にきなよ」と言われたのだから、それは当
然のことだろう。それに、やっぱり部屋に一人でついていくという
のは色々と怖いのもかもしれない。

「嫌？」

「ううん！ 嫌なんてことないよ！ ただ、ちょっとびっくりして・
·····その、緊張というか」

彼女は大げさに首を振る。

僕は安心させようと思って、ほほ笑んでから彼女の頭をなでる。

彼女は「あっ」と小さく呟いてから、顔を赤らめて僕のでのひら
に体を委ねた。

そう、ここで断られては困る。

もちろんいつでもいいといえはそうなのだけれど、僕の決心が揺
らいでしまう。

僕はしばらくそうしてから、手を引つ込める。

「病院の前で待ってるから」

そう言うってから、彼女の返事を聞く前に病室を出た。

心臓がドクドクとなっている。

もうすぐ、もうすぐ全てがわかるよ。

心の中でそう誰とも言えない誰かに呟いて、僕は病院の外へと向かった。

数分後、彼女は私服に着替えてから病院の前の僕と合流した。どうやらまだ緊張している様子で、一歩一歩がやたらゆっくりとしている。

僕はなるべく彼女を安心させるような言葉をかけてから、手をつないでゆっくりと歩き始めた。

アパートまでは、病院から歩いて10分ほどの場所に位置している。

そのアパートに近づけば近づくほど、握った彼女の手のひらが汗ばんでいくのを感じる。

余程の緊張か、あるいは何か思い出そうとしているのか。

僕はゆっくりと彼女の歩調に合わせるようにして足を進めた。

街にはほとんど人の姿が見えず、車も全然その姿を見せない。街に出てきたはずなのに、なぜだかまだ病室にいるみたいだ。

どんどんゆっくりとなる彼女の歩調に合わせていたら、本来10分で行くはずの道のりがたっぷり20分もかかってしまった。

けれどどんなにゆっくりになっても、彼女は一度も足を止めることなくそのアパートの前へとたどり着く。

アパートはいたって普通のもので、黄色い壁に3階建てのものだ。

「部屋は、2階の一番奥だよ」

そう言うと、彼女がビクリと震えた。

「嘘……」

「え？」

彼女の顔は、緊張とは別のものに染まっていた。青く、体がかすかに震えている。

それはまさに、恐怖におびえているようだった。

「佳夜？」

彼女の名前を呼ぶと、びくりと震えてから。

「な、なんでもない」

と笑った。しかし顔は相変わらず青い。

もしかして、彼女はもう

僕は彼女の手を握ったままアパートの階段を上り、一番奥へと進む。

彼女はずっと青い顔で俯いたまま何も言わなかった。

何もしゃべらず、一歩一歩操り人形のように足を進める。

そして、その部屋の扉の前にたどり着く。

僕はポケットから鍵を取り出して鍵穴に差し込む。

ガチャリという音が響く。それと同時に彼女は一瞬びくりと震えた。

僕はドアを引き、扉を開け放つ。

「さあ、入って」

ドアを開けたまま、彼女に先に入るように促す。

彼女は青い顔のままだった。

逃げだすかと思っただけけれど、一回こくりと頷いてから部屋の中へと入っていった。

僕もそれに続くようにして中へと入り、扉を閉めた。

彼女は靴を脱ぎ、廊下を少しづつ歩きながら進む。

玄関を開けるとまず廊下の左手に風呂場とトイレがあり、右側に少し大きめのキッチンが陣取っている。短い廊下を突き進み、戸を開けるとそこが唯一の部屋となっている。

彼女は恐る恐る足を進める。そして戸に手をかける。

その状態のまま数秒停止して、決心したかのように思いきり戸を開いた。

その部屋には、何もなかった。

もともとのアパートに置いてあるクローゼット以外本当に何もなかった。

がらんとした長方形の空間。

とても誰かが生活しているようには見えなかった。

彼女はその部屋を見たあと、ゆっくりとこちらを振り向く。

あきらかな動揺、困惑。

僕は廊下と廊下の端で向かい合う。

僕は、ほほ笑んだ。

「何か、思いました？」

そう尋ねると、彼女は無言で俯く。

そして両手を胸の前でぎゅっと握った。

確信した。

彼女はもう、きつとすべて思い出している。

アパートの前でのあの表情、そして今明らかに彼女の顔を染める
恐怖と後悔の色。

「例えば」

安心して、これですべて終わるから。
これですべてわかるよ。
お兄ちゃん。

「死体とか」

第6章 思い出の人

死体

その単語を聞いた瞬間、彼女がビクリと震える。相変わらず俯いたままだった。

僕は投げかけるように、攻撃するかの様に言葉を続ける。

「例えば、包丁とか。例えば」

「もうやめてっ!!」

彼女が頭を押さえるようにして頭を振る。

一瞬僕は口を閉じる。心臓がバクバクなっているのに気づく。そして一度呼吸を整えてから。

「霧乃蒼也とか」

彼女の制止を無視して言葉を続けた。

途端、彼女が真っ青な顔で僕を見つめた。絶望と驚愕。

「な、なんで……」

「やっぱり、あなたが殺したんですね」

僕は彼女の瞳を見据える。

前までは透きとおるように美しかった瞳も、今はなんだか濁ってみる。

あんなに美しかった彼女の髪が、なんだかボロボロに見えた。

だからといって、僕の胸に罪悪感などない。

「あなたが、霧乃蒼也を殺したんですね」

もう一度、確認するように 彼女の心臓めがけて言葉を突き刺す。

彼女は多分、既に思い出しているだろう。記憶喪失というのが嘘だったとは思わないけれど、さっきの様子からして何か思い出していたのは確かだと思った。

「あ、蒼也が」

彼女は震えた声でようやく話し始めた。

その声にはまだ怯えと不安が入り混じっていたけれど、それ以上に強い怒りを感じた。

次の瞬間、真っ赤な顔で彼女は僕を睨みつけてきた。

「蒼也が悪いのよ！ 浮気なんかするから！ 信じてたのに！」

「浮気？」

「そうよ！ 私知ってたんだから、彼が毎週この部屋に女の子連れ込んでたこと！ 知ってたけど、我慢した。いつかは絶対に私一人を選んでくれると信じてた。なのに！ 蒼也はその女と一向に縁を切ろうとはしてくれなかった……だから……だから……だか

ら・・・・・・・・」

だから殺した、そういうことだろう。

最初は意気込んでいた彼女も、どんどんその声は悲しみに染まっていった。

嫉妬からくる怒りに身を任せて、殺したのか。

悲しい誤解　歪んだ感情

そうか、そうだったんだ。

突如急激な胸の痛みに襲われた。

僕も、その歯車の一つだったんだ

「違いますよ」

痛みをこらえながら、この熱気だった空間に一滴の水を投じるように言葉を落とす。

「蒼也は浮気なんてしてません」

彼女の瞳が困惑に揺らぐ。

「浮気なんてしてません」

えぐるように、深々とさすように、執拗に「してませんよ」と繰り返した。

「嘘………嘘よ………だ、だって！ 確かに私みたもの！」

「それは………たぶん、僕です」

「え………?」

意味がわからないのだろう、彼女は黙って僕を見つめる。
僕は彼女の視線を無視して、上着を脱ぎ始める。

「ちょ、ちよつと！」

「あの頃はまだ髪が長かったから、気付かなかったんだと思います」

突然服を脱ぎはじめた僕に彼女は驚き声を上げたが、僕は無視して上着を脱ぎシャツ一枚だけとなる。そしてそのシャツも脱ぎ去る。

「あなたに会うために、髪型を蒼也と………兄と一緒にのものにしたんです」

シャツも脱ぎ去り本来むき出しとなるはずの上半身に、何か包帯のようなものがぐるぐると巻かれている。

僕はそれをゆっくりほどきながら言葉を続ける。

彼女はそんな僕を「わけがわからない」という風にぼんやりと眺めている。

「本当は、この部屋にあなたを連れてくるのはもつと後の予定でした。あなたが確実に思い出してくれると確信が持てるまで待つつもりだった。けれど、あなたは予想以上に記憶の回復が早かった。だから、僕は今日ここに連れてくることにしたんです」

そしてその包帯のようなものを全てほどききると、パサリと音を立てて床に落ちた。

今度こそ確実に、僕の上半身があらわになる。

彼女は息をのみ、「嘘」と一言つぶやいて口を覆った。

僕の上半身、胸のあたりには確かな二つの膨らみと桜色の突起。

同い年の子と比べると小さいけれど、男性のそれと比べるとはるかに膨らみがある。

“私”は口を手で覆い絶句する彼女に向って、にこりと微笑んでから

「はじめまして、霧乃紅音です」

そう挨拶をした。

私とお兄ちゃんは毎週、お兄ちゃんの部屋（時々喫茶店）で話をするのが日課になっていた。

お兄ちゃんとは同じ大学に通っているのだけれど、いい年して兄妹で同棲するのは少し恥ずかしかったから、住むアパートは別した。お兄ちゃんは決まって大学の「楓佳夜」という彼女の話を楽しそうにした。

その1週間、その彼女と何処に遊びにいったとか、何をしたとか、そういうことを本当に楽しそうに逐一報告してくれた。

別に私は報告してほしいなんて言っていないのに、お兄ちゃんは本

当に楽しそうに毎週その話をしてくれた。だから私は黙ってその話に耳を傾けた。

私はその楽しそうなお兄ちゃんの顔が好きだった。

うつん、違つ。

例え悲しそうな顔でも、ぼんやりした顔でも、寝ぐせびんびんの寝ぼけた顔でも、私はお兄ちゃんの顔が好きだった。

私は、お兄ちゃんが大好きだった。本当に、好きで好きで仕方なかった。

なんで兄妹なんだろうと嘆いたこともあった。

もう今はそんなことはない。私はお兄ちゃんの妹でよかったと本当に思ってる。

また、佳夜という人を憎んだりはしなかった。

逆に私もその人に会ってみたいと思った。

私とお兄ちゃんは感性が似ているから、その人ともうまがあうと思つた。

仲良くなれると強く感じた。

そんなある日、事件は起こつた。

私はいつものようにお兄ちゃんの部屋へと向かつた。

合鍵を貰っていたから、いつもどおりそれで部屋を開けた。

今日はどんな表情で話をしてくれるのだろう、どんな笑顔を私に向けてくれるのだろう。

それを考えるだけで、私の胸は高鳴つた。

短い廊下を走り、思いきり戸をあけて「お兄ちゃん」と笑顔で呼んだ。

いつもなら私がそう言って入ってくると、お兄ちゃんは私に笑顔を向けてくれた。

けど、その日は違った。

お兄ちゃんは、私に笑顔を向けることなんてしなかった。私を出迎えてくれたのは、冷たくなったお兄ちゃんだった。

お兄ちゃんは腹部に刺さった包丁を両手で握りながら、床に血の海を作り穏やかな表情で死んでいた。

本当に穏やかな表情だった。苦痛などみじんも感じられなかった。私は一瞬何が起こったのかわからなかった。

ゆっくりと膝をつき、お兄ちゃんの顔に指で触れた。

冷たかった、とても冷たかった。

そして気づいた。床に何か赤い文字が書かれていた。

きつと血文字というやつだろう。

おそらく朦朧とする意識の中で、最後の力を振り絞りお兄ちゃんが残してくれたメッセージ。

「ありがとう さようなら」

その10文字が、真紅の色で床にはっきりと書かれていた。

私はそれと呼んだ瞬間、頭の中で何かはじけるのを感じた。

自分の中で何かはじけた。

そしてお兄ちゃんの頭を抱えて泣いた。泣いて、泣いて泣き叫んだ。

警察は自殺だと判断した。けれど私は納得できなかった。

あのお兄ちゃんが自殺なんてするはずがないという確信を持っていた。

けれど、警察は動こうとしなかった。

おそらくあの血のメッセージと、あの穏やかな表情。確かにあそこには争った形跡など何もなかった。

自殺したと判断する方が自然だという材料がひしめいていた。

けれど私は信じなかった。

「ありがとう さようなら」

このメッセージの別の意味を、私は知っていたから。

だから、私は楓佳夜に近づこうと思った。

私はその時点である確信を持っていたのかもしれない。

彼女こそが、お兄ちゃんを殺した犯人だと。

まず、彼女の今の居場所を調べなくてはいけないと思った。

彼女の話はお兄ちゃんからよく聞かされていたから、大学の学部と学科はわかった。

けれど顔まではわからなかった。

そこで、お兄ちゃんがよくお世話になっていたという先生を訪ねてみることにした。

案の定、その先生はお兄ちゃんと佳夜さんのことをよく知っていた。

先生も兄から私のことをよく聞かされていたようで、よくしてくれた。

そこで先生から楓佳夜は事故を起こして、今は入院をしているということを教えられた。

その入院をした日は、お兄ちゃんが殺された日だった。

私は葬式の間絶対に泣かなかった。もう泣かないと誓った。

次に泣くのは、お兄ちゃんを殺した犯人を突き止めてからだと決めていた。

私は病院に向かった。そして楓佳夜に面会をしたいと言うと、医者に彼女は今記憶喪失だということを聞いた。

ショックだった。医者のことだからそれは嘘ではないだろう。どうすればいいかわからなかった。記憶のない彼女に会おうかとも思ったけれど、何を話せばいいのかわからないし、何を訊けばいいのかわからない。

私は大学に戻り、先生にどうすればいいのか訊いた。

先生にはすべてを話した。

私が、彼女が犯人だと疑っていることも何もかも包み隠さず。

先生は親身になって私の相談に乗ってくれた。そこで、ある妙案を教えてくれた。

1歳違いの私とお兄ちゃんの顔はよく似ていた。

顔どころか、声もよく似ていた。

小さい頃両親によく間違えられたくらいだ。

私の髪はだいぶ伸びたから今では間違えることはないだろうけど、それでも顔と声はやっぱり似ていた。

だから、先生は私に「蒼也の振りをしてみてはどうか？」と提案した。

それは、とても面白いことだと思った。同時に、それしかないという確信もあった。

私はお兄ちゃんから佳夜という女性のことをよく聞かされていたから、彼女の趣味や好きなものは自然と覚えていた。

それに、兄の部屋から見つけた大量の手紙は私が保管していたから、あれを読めばもっと彼女のことをかわかると思った。

だから私はその案を二つ返事で受け入れて、腰まで伸びた髪を一気に切り肩の辺りで揃えた。

服ももちろんいつもの女の子のような服ではなく、男の子の服を着るようにした。

胸にはさらしを巻き、自分のことをお兄ちゃんと同じように“僕”と呼ぶことにした。

病院の医者に会うのが一番緊張した。一度彼には“私”であったころの自分を見られていたから。

けれど、彼は私を見るや否や「はじめまして」と言ってきたから、酷く安心した。

そして医者には「この前は妹がお世話になりました」と言っておいた。

驚くほどに彼は私の言葉をすんなりと信じてしまったから、逆に怖くなった。

何もかもうまくいくと、怖くなってしまつものだ。

けれど私は立ち止まるわけにはいかなかった。

誓ったんだ、絶対犯人を捜し出すと。

そして、その犯人に絶望を植え付けてやると。

例え兄がそれを望んでなくても、私は犯人のことが許せなかった。

私はそんなす黒いものを胸の奥にそっと隠すように沈めた。

そして、楓佳夜と書かれた病室の扉を開いたのだ。霧乃蒼也として。

「はじめまして、霧乃紅音です」

彼女は相変わらず口元を押さえたまま絶句している。

そうではなくては困る。今まで恋人だと思っていた人物が実は別人で、しかも実は女だったのだから。

私と彼女の間の数メートルには、静寂が満ち満ち緊張の糸が幾重にも張り巡らされている。一步でも動けば、ぷつんと音を立てて崩れ落ちてしまいそうに不安定な空気。

しばらくして、彼女は口元を覆っていた手をゆっくりと下ろして両手を胸の当たりで握った。

「そっか、そういうこと……だっただね」

さつきより幾分か落ち着いて様子で、彼女は呟いた。

どういう意味？

「どどういう意味ですか？」

気がつくとは私は思ったことを口にしていた。

その言葉には今までのように優しきは込められていない、明らかなる悪意を込めて私は口を開いていた。

「あなたは、私が犯人だと思って近づいたのね？」

「……っ！」

驚いた。彼女はこんなに察しがよかったのだろうか……いや、違う。もしかして

「気づいていた……いや、既に思っていたんですか？
私が蒼也とは別人だと」

彼女はゆつくりと、深い悲哀を込めた表情でうなずいた。

「本当はね、最初丘に連れて行ってもらった時に全部思い出したの。彼の顔も、思い出も、ファーストキスも、何もかも」

じゃあ、あの時彼女が泣いていたのはすべて思い出したから・・・

「それじゃあ」

「私は知りたかった」

私の疑問を遮るように、彼女は言葉を続けた。

私も彼女の言葉に黙って耳を傾ける。

「あなたは自分は蒼也だと言って私に近づいてきた。でもあなたは蒼也とは別人だと、丘に連れて行ってもらった時に気付いた。別人だと気づいたのだけれど、なぜだか気になってしかたなかった。

だってあなたはどこか、蒼也を感じさせた。

蒼也の雰囲気をおあなたは漂わせていたから。

だから、もう少しあなたと一緒にいたいと思った。

あなたが一体何者なのか、一体なぜ私に近づいてきたのかを確かめたいと思った」

だから彼女は記憶がないふりをして、私を毎日待っていたのか。“僕”が一体誰なのかを確かめるために。

「あなたは本当に蒼也のようだった。

思い出の場所も、その時話した会話もまるで本物のようだった。だから時々、もしかしてあなたは本当に蒼也なんじゃないかと、

天国から私に会いに来てくれたんじゃないかと、馬鹿な妄想もした。自分で、私がこの手で殺したのに……」

彼女は自分を抱きしめるようにして肩を震わせた。

「気づいたら、私は蒼也を思わせるあなたのことがいつしか好きになっていた。

だから、海に向かうときはわくわくして仕方なかった。あそこは私と彼が初めてキスをした場所だから……電車に乗った時点で海に向かうと気づいたけど、それをあなたに悟られまいと風景ばかり見ていた。

そして私たちは海につき、あたかも今そこで思い出したかのように私はキスをした。

嬉しかった。けれどそれと同時に、とても悲しかった。やっぱりあなたは蒼也じゃないと気付かされてしまったから。

蒼也の唇の味とはやっぱり少しだけ、似ていたけれど少しだけ違っていたから。

さすがに実は女の子だった、なんてことには気付かなかったけれど」

彼女は自嘲気味に微笑んだ。私はただ無表情で彼女の次の言葉を待つ。

「歌を歌ってくれた時もびっくりした。

だって、てつきり知らないと思ってたから。

ダメ元で試しに言ってみたら本当に歌いだすから、びっくりして……それと同じぐらい嬉しくて泣いちゃった……

だから部屋に行こうと言われたときも、本当に嬉しかったけれど怖かった。

だってあなたは、やっぱり蒼也じゃないんだもの。

どうしようか、本当に迷った。けれど私はこうして結局あなたについてきてしまった。あなたが纏う蒼也の空気が私を狂わせたの。けれど、足を踏み出してすぐに後悔した。

なぜだか、あなたが蒼也の部屋に向かっているのだと、本能的に気づいてしまった。

その瞬間、あのとときの光景が私の脳内で映画のように鮮明に流れ始めた。

必死に私に何か言葉をかける蒼也、泣きながら我を失って包丁を握りしめる私、そして彼のお腹に突き刺さる包丁。怖くなってそのまま逃げだす私。

とても雨が強い日で、私の手についた彼の血はいつしか流れ落ちていった。ふらふらと街の中を彷徨う私。傘もささずに、ずぶぬれになりながら　　そこが道路だと気付かずに、信号が赤く瞬いていることにも気付かずに。

そして突然私の意識は途切れた　　目覚めたときは病院だった。私は記憶という大きすぎる代償とともに、意識を取り戻した。意識を取り戻した時、思い出せるのは自分の名前だけだった。

私は偶然に、そして不幸にも、記憶喪失という形で罪から逃げきってしまったのよ」

彼女は始終床に向かって淡々と言葉を呟いていたが、そこまで喋ると僕に瞳を向けた。

その瞳は蠟燭のように揺らめき輝いていた。

今にも泣き出しそうだった。奈落の悲しみが黒々とその姿をのぞかせている。

「そして今、やっとあなたの目的がわかった。

あなたは、私が蒼也を殺した犯人だと思い私に近づいた。

そして私にそれを思い出させて、罪を償わせるのが目的だったのね」

「……まあ、大体そんなところですよ」

本当は違った。

償ってもらおうなどと思ってはいない、というより償えるわけがないだろう。

一体私の大好きな兄を、お兄ちゃんを殺した罪をどうして償えると思っっているのだろうか？

私はただ彼女に兄を殺したという事実を思い出してもらい、そしてその罪に苛まれながら苦しみ絶望に陥って欲しかったのだ。

その絶望に苛まれながら、これから苦しみながら生き続けてしまえと、そうドス黒く心の底から願ったんだ。

それは勿論彼女には言わない。言わずとも、私の目的はもう達成された。

だからあの言葉、「さようなら ありがとう」という言葉は伝えない。

もしかしたらこれは、彼女にとって救いになってしまつかもしれないから。

「あなたとは……」

突然の囁くような声に、私ははっとして彼女の顔を見る。

彼女は微笑んでいた。とてつもなく、これ以上ないほどに寂しうに、そして穏やかに。

とても美しいと思った。なぜだか涙がでそうなほど美しかった。そしてその表情は、どこかで見たとあると思った。

そうか、その顔は その表情は

「あなたとは、別の形で出会いたかった……」

そう言っただけ彼女がポケットからナイフを取り出した。小さな果物ナイフ、だけれど人を殺すには十分な凶器となりえる。

病院から持ちだしてきていたのだろう。

「だ、だめっ！」

私は気付けば駆け出していた。駆け出したはずなのに、体が思うように動かない。

世界が全てスローに動いているように感じた。

時間が遅くなった世界で、彼女だけはなぜだか普通の時間の中に生きていた。足を踏み出した私を相変わらず微笑みながら見つめる彼女。

「さよなら」

そして、その瞳から一滴の滴が流れおち、きらきらと輝きながら床に落ちていった。

次の瞬間、彼女の握られたナイフが空をきりさき、続いて彼女の腹部に深々と侵入していった。

ズブズブという音とともに、朱に染まりながらきらめく刃。

けれど彼女は私に向かって穏やかに微笑んでいた。

その表情は　お兄ちゃんに、とてもよく似ていると思った。

第7章 思い出とともに

お兄ちゃんはよく、私と話ながら歌を歌っていた。

お兄ちゃんが大好きなラブソング、大切な人のための歌。

私は最初あまり好きになれなかった。

だって歌詞が悲しいものだったから。

私がそう言くと、お兄ちゃんは

「確かに悲しいけれど、これは真実を歌っているんだ」

と言った。

よくわからなかったけど、お兄ちゃんのその時のどこかさびしそうな表情だけは今でも覚えている。

気がつくと、私もその歌を一緒に歌うようになっていた。

歌詞もすっかり体に染み込んでしまった。

その歌は、愛する人の死を歌う悲しい歌。けれど、真実の歌。

愛する人のことを想いながら嘆き悲しむけれど、最後には死を受け入れて前へ進む決心をする。

その歌は、最後にこのセリフで締めくくられる。

「さよなら ありがとう」

それは、大切な人のために歌う歌。

ラブソング

ピッピッピッ

電子音が病室で響いている。

彼女、楓佳夜はある病室の一室で穏やかに眠っている。

電子音と穏やかに上下する胸が彼女が生きていることを証明していた。

しばらくして彼女は意識を取り戻し、ゆっくりと目を開ける。

真白い天井、真っ白なベッド、電子音。

いつもの病室とは明らかに様子が違う。

そして自分がなぜここにいるのかわからなかった。

ゆっくりと上半身を起こそうとする。

「傷口が開くかもしれないから、まだ体は起こさない方がいいと思う」

突然、どこからか声が聞こえてきた。

どうやら病室には、彼女以外に誰かがいるようだ。彼女は言われたとおりに体を再びベッドに横たえる。

「どうして、私を助けたの？」

彼女は横たえたまま、病室にいる誰かに声をかける。

「あなたは、勘違いしています。私はあなたに死んでほしいなど思っていないし、償って欲しいとも思っていないせん。」

第一、償えると思っっているんですか？」

誰かの声にはどこか怒りが込められていたが、それ以上に何か別の感情も見え隠れしていた。

佳夜は天井を見つめたままゆっくりと深呼吸をした。

「そうね………愚かだったわ、ごめんなさい」

その言葉は誰かの胸にしっかりと届いただろうか？

顔が見えない彼女にはそれがわからなかったけれど、きっと届いてくれただろうと信じた。

「………そっくりだったんです」

「え？」

消え入るような声。

さっきまでの怒りが込められていたものとは明らかに雰囲気違った。つた。

「そっくりだったんです。包丁を自分のお腹に突き刺した時のあなたの表情が、兄と………兄が死んでいる時の、表情と、そっくり………だったんです」

時々つかえながら、誰かは苦しそうにそう言った。
泣いているのだろうか？

佳夜はわからなかった。彼女がなぜ泣いているのか、一体何で泣いているのかわからなくて、苦しかった。

どうすれば泣きやんでくれるのか、わからなかった。

「もう、嫌なんです………」

風前の灯を感じさせる声。
今にも途切れてしまいそうだった。
けれど不思議とその声は、佳夜の胸にしつかりと届いた。

「あんな表情をしながら……死ぬ人を見るのは……もう、嫌なんです……」

彼女の声は悲痛なものだった。

彼は、あの時と私と同じような表情で死んでいた……？
そんな筈ない。だって、あの時私は確かに　　微笑んでいたはずなのに

「兄は……自殺として、警察に扱われました。なぜだかわかりますか？」

わからないという意味を込めて、無言を通した。

「床に……メッセージが書かれていたんです。

私は最初、それがダイニングメッセージかと……

兄が私にだけ犯人を告げてくれたものだと思っていたんです。

でも、違いました。

それはダイニングメッセージなんかじゃなかった……

それは兄が、自分が自殺だと警察に思わせるために、残した言葉なんです」

自分が自殺だと……なぜ？

そこまで考えて、佳夜は気付いた。彼の残してくれた深い愛に、

最後の最後まで私を深く愛してくれた彼の愛に。

「兄は、あなたが殺人犯だと警察に扱われないようにそのメッセージを自らの血で床に残し、そして微笑みながらその手で……朦朧とする意識の中で、包丁を握ったんです」

私は、彼に庇われたんだ。

最後の最後で、私は結局彼に助けられたんだ。

いつの間にか、佳夜は泣いていた。

佳夜自身はまるでそのことに気付かないかのように、その涙を拭おうともせずに枕を涙で濡らし続けていた。

「兄の、最後のメッセージは」

「さよなら ありがとう」

それは、あの歌の最後の言葉。
愛する人への真実の言葉。

「さよなら ありがとう」

佳夜は自らの唇でその言葉を紡ぐ。

途端に、彼に会いたくて仕方なくなった。

自分で殺したはずの彼が愛しくて愛しくて、会いたくて

「私は」

誰かが口を開く。

佳夜は黙って言葉を待つ。

「私は、あなたを絶対に許しません。だから」

「だから、絶対に自殺なんてしないでください」

その言葉のあと、ボタンという扉の閉まる音。

どうやら誰かはこの部屋から出て行ったようだ。

一人取り残された佳夜は、静かに泣きながら屋上を見上げていた。やっとわかった、彼女がなぜ私に近づいてきたのか。彼女がなぜ私に記憶を取り戻させたのか、彼女は

断続的な電子音だけが、いつまでも病室でなり続けていた。

最終章 ラブソング

季節は巡り春となった。

丘の上の一本桜は、毎年のようにその優雅さを思う存分ふりまいてる。

桃色の花びらが風に舞い、仄かに甘い香りをふりまいている。

私はその桜の下に腰掛け街並みを眺める。

そして、ある歌を口ずさみ始める。

もう1年近く歌っていなかったから少しだけ不安だったけれど、体に染み込まれたものはなかなか体を抜けることはなく、歌い始めたらすらすらと言葉が唇から溢れてきた。

3分ほどの短いラブソング。

この歌を共に歌ったある人を想いながら、街並みを眺める。

歌い終わると同時に、涙が私の頬を伝い落ちていった。

ふと後ろに誰かの気配を感じたので、私は立ち上がり、振り返る。

「おひさしぶりです」

私は立ち上がり、そういつてペコリと軽く頭を下げる。向こうも会釈を返す。

「約束通り、死なないでくれたんですね」

「……はい」

彼女、楓佳夜と逢うのも約一年ぶりだ。

あれから私たちは一切連絡を取り合っていなかった。

私が今日ここに彼女を呼び出したのは、別に何か特別な理由があったからじゃない。

言い忘れていたことがあったから、ただなんとなく呼び出しただけだ。

「私、あなたに言い忘れていたことがあったんです」

「……………なんででしょう?」

風が舞い、二人の髪を揺らした。私もあれから髪を伸ばしたので、今ではセミロングぐらいにはなった。彼女の髪は相変わらず長く、腰のあたりまで伸びている。前と同じ、透きとおるような黒。嫉妬するほどに綺麗だと、また思った。

「私も、そう思います」

「え?」

「私も、あなたとは別のかたちで出会いたかったと、そう思います。今でもそう思っています」

言葉の意味がわかったのか。彼女は少しだけ控え目に微笑んだ。私はなるべく無表情のままだった。

「私は、これからもずっとあなたを憎み続けます。絶対に赦すことはいけません」

強い口調でそう言うと、彼女は悲しそうに瞳を暗い色で染めた。けれど、決して私の視線を避けようとせず、その瞳で私の瞳を力強く見つめ返してきた。

私の言葉を胸に深く、刻み込んでくれているのだと感じた。

その瞳に伝えるように、あるいは突き刺すように私は強い口調で言葉を続ける。

「だから、絶対に自殺とかしないでください。苦しみながら生き続けてください。」

私は、あなたを憎しみながら生き続けます。

もしあなたが自殺なんかしたら……したら……」

なぜか涙が出た。

悲しいからじゃない、切ないからじゃない。

悔しかった。ただただひたすらに悔しかったんだ。

彼女が自殺する様を想像するだけで、悔しかった。

あんなにもお兄ちゃんが大切に愛しいと思っていた人が、命を賭してまで守ろうとした愛しい人が自殺をするなんて考えるだけで、悔しくてしかなかった。

まるで、兄の努力を一蹴されたように思えた。

「私は、絶対にあなたを赦しません」

一滴二滴とこぼれ落ちる涙を拭うこともせず、ありったけの憎しみをこめて彼女をにらんだ。

彼女はさみしそうな表情で、私と同じように泣きそうだった。

ああ、やっぱりこの人と私は似ていると、なぜか強くそう思った。

「ありがとうございます」

彼女は泣きそうな顔のまま、そう呟いた。

「なぜ、お礼なんて言うんですか？」

私は喉からあふれ出ようとする嗚咽を抑えながら、なるべく平静を装って彼女に訊ねる。

「わかりません。でも、あなたにはお礼を言わなくてはいけない・・・気がしたから、だから」

そう言っただけで彼女はまた一度私に深く頭を下げ、ありがとございませうと、かろつじて聞こえるほどのかすれた声で言った。

途端、視界がぼやけた。何も見えなくなった。

何かがこみ上げてくるのを堪えられなかった。

嗚咽を我慢することなど、できるわけもなかった。

私はその場に膝から崩れ落ちて、みつともなく泣いた。泣き叫んだ。

もう、泣いてもいいんだよ

そう、誰かに言われた気がしたんだ。

私の気持ちが悪く落ちてくるところ、彼女はいつの間にか立ち去っていた。

私に気を使ったのだろう。少しだけ、感謝することにした。

私はこれからは彼女を救うことなんてできないと思う。

赦しちゃいけないと思う。

だって、もし私が彼女を救ってしまったら

私はそこで考えるのをやめて、街並みを眺める。

街並みはすっかり夕暮れに染まっていった。

桜の花びらが街並みに向かってその身を舞わせていく。

ゆっくりと歌を歌った。
なんどもなんども繰り返した。
3分歌っては、また3分歌った。

ラブソング

愛する人のために歌う歌。

私の愛する人はもういなくなってしまったけれど、私はこの歌を
歌い続けよう。

この歌が私と彼を、そしてあの人を結ぶ唯一の残された絆なのだ
から。

おそらく、もう二度と逢うことはないだろうけれど……
だから

さよなら ありがとう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0389f/>

ラヴソング

2011年1月2日02時40分発行